

糸賀一雄研究 (4)

糸賀思想に影響を与えた人々との出会い

—実践における2人の師池田太郎、田村一二を中心に—

○ 京都文教短期大学 氏名 石野美也子 (002485)

キーワード3つ: 思想、教育、出会い

1. 研究目的

これまでの3回の糸賀研究を通して、糸賀の集大成ともいえる実践から見つめた人間観として、映画「夜明け前の子どもたち」に始まり、糸賀が今に残したものを考察してきた。その糸賀の考えはどのようなものであったか、近江学園を築いた池田太郎・田村一二とともに、それぞれの思想が実践でどのように展開されるかを考察してきた。本発表は日本の「ノーマライゼーション」の先駆けとも言われた糸賀の思想はどのように形成されてきたか。特に以降に池田・田村にどのように影響を受けてきたのかを考察する。

2. 研究の視点および方法

主に糸賀の著作の中で2人に触れている記述からその影響を見るとともに、池田太郎、田村一二の教育観が、その後の糸賀に大きな影響を与えたという点に注目し、糸賀思想の形成過程を見ていく。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会の倫理規定に基づき配慮した。しかし、施設名は個人を特定する内容が含まれていないため必要に応じて実名で表記する。知的障害者という用語については議論のあるところだが、法律に基づき知的障害児(者)という用語と文字を用いる。

4. 研究結果

糸賀は「福祉の道行」⁽¹⁾の「序」に次のように書いている。「過去の事実はその事実の生じた背景とともに、いつでも現在の考え方によっていかようにでも解釈されるものであって、単なる客観的な事実それ自体は一つ一つの素材ではあっても、素材の羅列が歴史となるのではないようである。歴史には思想の流れが生きて脈打つときにはじめてその名に値するものといえるようだ。」 『—生命の輝く子どもたち— 福祉の道行き』p3~4

歴史には思想の流れが生きて脈打つとは、糸賀の人生そのものに思える。過去の一つ一つが思想の流れの基になり、歴史を生むのである。学生時代の糸賀の歴史にも思想を形作る原点があるがここでは、先に述べたように京都大学卒業後の糸賀の人との出会いの中で実践に根ざし、如何に思想を形成していったかを述べる。

「内わのものといっても生ま身の人間である。考え方や生き方の相違があり、発展がある。喜びも絶望もある。われわれは何時も、はじめにもどり、めざすものは何であったか、自らに問い、人にも問い、確かめあって、今日まで辿ってきたのであった。」(原文ママ)「こ

の子らを世の光に」p.19とある。この言葉は3人の関係だけでなく、近江学園にかかわる多くの人々の関係性を表したものであるが、3人の関係においても例外ではない。すでに池田、田村は滋賀県に来る以前から京都でその実践は認められており、糸賀は滋賀県で行政にその手腕を振るってきた。このように一人ひとりが偉大な実践家であり、それゆえに、その考え方は時にはぶつかることもあった。しかし、その根底にある「人間愛」はお互いに認め合っており、特に糸賀は池田・田村を偉大な教育実践家として生涯尊敬してきた。糸賀の思春期において圓山文雄が重要な役割を果たした人物であるなら、糸賀の知的障害者福祉への道のりと、その後の思想に大きな役割を果たしたのは池田太郎、田村一二である。池田太郎との出会いは昭和13年、春、糸賀が代用教員となった第二衣笠小学校である。当時の印象を糸賀は「決して雄弁ではないが、話題が一たん教えている子どものこと、教育のこと、児童心理学のこととなると熱中してしまって、恐ろしく執拗に雄弁になる」と池田の教育にかける情熱について語っている。また池田の心理学者の立場から哲学書や文学書を読破していくという勉強の態度に、糸賀自身、一つのことに凝って十年続けるのは恐ろしいものだと言ったとある。また、放課後に池田は丹念に一日の子どもたちの観察記録を付けていた。それは指導記録でもあり、反省記録でもあった。

田村一二との出会いは、昭和18年元旦に池田に案内され滋野小学校に訪問したことに始まる。知的障害児の教育は学校の中だけではどうしても乗り越えられないものを当時の田村は感じており、それを知った池田が糸賀と会わせたのである。田村は糸賀に知的障害児の子ども「よさ」をはらわたを絞るように、ぽつりぽつりと語ったという。戦争が激しくなる頃、田村は自分の家に教え子を何人か呼び、共に食事をし、風呂に入るという生活を共にする教育を試みて、教室だけの教育に限界を感じた。糸賀は、この田村一二を滋賀県に迎え、その宿題をかなえさせたいと思った。その場所が石山学園であり、のちの近江学園に至るエピローグともいえる。

5. 考察

糸賀の「実践における人間観」「教育観」は二人とのかかわりによって触発されたといえる。池田からはコツコツと続けていくことの大切さと、後年様々な発見に通じる「記録」と「観察」の重要性、心理学から見た哲学、それはとりもなおさず実践の学であり、田村からは知的障害児の教育と情熱、また共に暮らす中での教育の在り方を学び、だれもが変わりなく暮らせる社会の創造という考え方を学んだ。近江学園設立を前に糸賀はある出来事を思い出す。終戦後、8つ位の女の子が屑箱をあさっていたのを見て糸賀は可哀想だと思ってもそれ以上は政府のすることだと自己の問題に掘り下げようとしなかったが、二人にとってはそれはすでに自己の問題になっていたのだと気付く。このように糸賀は実践を通し、2人の考えにふれ、自己の思想を確立してきたといえる。

(1)この著書は糸賀が新書用に1954年に書いたとされるものを「糸賀一雄生誕100年」に際し出版された。